※本インタビューは2011年にTOTOギャラリー間にて開催された「アラヴェナ展」の際に収録されたものです。TOTOのウェブサイト「New Material」の掲載は既に終了していますが、こちらに無断転載させていただいています。
掲載に関するお問い合わせ等は(pr@noizarchitects.com)までお願いいたします。

アレハンドロ・アラヴェナ　インタビュー
「建築の外側から考える」

聞き手：豊田啓介（noiz）

リード：
近年、より質の高い建築を生み出して注目されているチリでも、特に世界的に注目されているアレハンドロ・アラヴェナ氏が、ＴＯＴＯ　ギャラリー・間で７月２７日から１０月１日まで開催されているアレハンドロ・アラヴェナ展に併せて来日した。帰国前日の慌ただしいスケジュールの合間を縫い、近作や建築に対する姿勢、同じ地震国として東日本大震災後の日本の社会や建築事情に関する考えなど、多様な観点からの貴重な話をうかがった。

建築を始めたきっかけ

豊田（以下KT）：
まずは、建築家になる前のお話から伺いたいと思います。どの時期に、どう建築に興味を持たれたのですか。特に、エレメンタルというソーシャルハウジングを専門的に扱う事務所と、一般的なデザインを行う個人事務所を並行して仕事を進めるという特殊な状況は、どういう経緯で生まれたのでしょうか。

アラヴェナ（以下AA）：
なぜ建築家になることにしたのかですか。私もわからないんです。覚えてないということではなく、当時私は建築というものが何なのか、そもそも理解していなかったのです。建築の勉強を始めたとき、私は１７才でした。学校で数学や美術の成績がよく、美術だけでやっていくだけの才能があるとは思えなかったけれど、それなら建築だろうと考えたのです。建築家というのがどういうものかというのは、後になって徐々に理解していったのです。

イタリアとの出会い

KT：
学校を卒業した後は、最初から自分で設計を始められたのでしょうか。建築を離れてバーを経営していた時期もあったとも聞きました。

AA：
そうです。１９８５年から１９９０年まで建築を学んで、１９９１年にヴェニス（に：トル）ビエンナーレに参加する機会がありました。建築教育を受けて初めての海外体験で、それまでは建築の勉強といっても本や写真を見るばかりでしたから、初めて建築を実際に街中で、肌で感じることができる体験がとても新鮮でした。なんとかしてもう一度イタリアに来たいと思い、大学院修了後、活動に縛りのない奨学金を得たのです。とにかく建物を直に見て、採寸し、図面を描き、そして何よりも、設計した建築家が何をどう考えどうデザインを決めていったのかを建物を前に考えたいと思っていたので、授業に出る必要がないのが良かったですね。そうした直接的に建築を体験するプロセスを経ることで、以前教授から学んだ多層的な知識が徐々に消化されて、何となく建築というものが分かり始めてきたのです。１９９４年にチリに戻り、自分で事務所を始めました。しかし、待っていたのは失望の連続でした。

実務と現実を通して、建築の価値を考えた

KT：
現実社会とのギャップということでしょうか。

AA:
私は地元に頼るべきネットワークを持っていませんでした。私は国のエリートの輪に入ってもいないし、よくあるように家族が自宅の設計を依頼してくれるわけでもない。とりあえず、バーやショップやクラブのような商業施設をいろいろと設計しました。こうしたプログラムではとにかく表現的であることを求められます。デザインのセンスが良いように見せる努力さえしていれば、建築家としての総合的な能力とは無関係に仕事が回っていくのです。それはある意味では良い経験で、こうした仕事ではプロジェクトに本当に何が必要かと真面目に考えるというよりは、デザイナーの自己表現としての形やデザイン、空間の質が、いかにそのプロジェクトに適したデザインかと施主を言いくるめることに集中すればいい。一度経験をしておくことは、極端な場合を知るという意味で悪くはありません。私の場合難しかったのは、人としてひどい施主に連続してあたってしまったということです。私は建築から離れることにしました。人として尊敬できない誰かのために自分の貴重な時間を捧げなければいけないのなら、建築に人生を費やす価値があるとは思えなかった。よほど何か他のことをやったほうが価値があります。ということで、全く建築から離れた生活を始めたのです。

KT：
まだいろいろなことと闘っている時期だったのですね。それは同時に正しい問いを設定することという、アラヴェナさんの信念を形成する時期でもあったということでしょうか。

AA：
少なくとも当時はそれがどういうことかは理解していませんでした。今は、本当に価値があると思える仕事だけを選択する、もしくはそうできる環境の価値を常に意識しています。プロジェクトを一つ完成させるには多大なエネルギーを使います。まずはそのプロジェクトについて沢山学ぶ必要がありますし、それまでに備えた知識も総動員して新たに再構成しなければなりません。でも価値あるプロジェクトでは、最後には全てが意味を為すのです。そうした意味を為さないようなプロジェクトなら、仕事を断るという選択肢もあるのです。当時そうしたこ

とに完全に意識的だったわけではありませんが、どう限られた時間を使うべきかを注意深く考えるようになったのがその頃なのは確かですね。でも、仕事に社会的、政治的な要素を取り込むということとはまた別の話です。それは２０００年にハーバード大学で教えはじめたことがきっかけでした。

ハーバード大での経験がもたらした気付き

KT：
ハーバード大学に教員として行く時点で、社会の富裕層という存在と、建築やデザインの持つ意味や役割ということに既に意識的になっていたということでしょうか。意識が醸造されていたところで適切なタイミングだったと。

AA：
そうでもないのです。正直に言えば、公的な助成金というものが何なのかすら当時の私は知らなかったのです。

１９９６年から１９９７年ごろまで建築から離れていた後で、もう一度建築に戻る機会がありました。ある彫刻家から小さな住宅を依頼された（「彫刻家の家」）のです。その後すぐ、まだほとんど実績もなかったにもかかわらず「数学部研究棟」を設計する機会を得ました。このプロジェクトは、仕事に何を投資するべきかを理解する重要な転機になりました。どれだけの時間働けばよい建築になるかなど、あらかじめ計算できません。とにかく良いものになるまで働き続けるだけです。でもそうした努力を重ねることが、次に何かより良い経験となるプロジェクトにつながっていくのです。個人住宅ではなく公共の教育施設であるということも、私にはとても意味のあることでした。

ハーバード大で教えることになった時、私が公共性や社会性に意識的になったのはいくつかの理由があったように思います。

まず一つ目は、戦略的な必要です。つまり、チリから来たまだ名もない若手建築家として、錚々（そうそう）たる教授達の中で、私が話せる価値のあることは何かを考えた結果なのです。ハーバードのような大学では教授たちも競争で、１５人の教授がより評価の高いスタジオにするため、質の高い学生を集めようと工夫を凝らします。当時の私のような名もない、チリ出身の若手にできたことは問いの質、チャレンジの質を高く保つことでした。私は特に建築の恣意性をいかに排除するかに興味があったので、スタジオのテーマを「別の可能性ということ（Otherwiseness）」という名前にしました。建築の選択肢は一つである必然性はありません。別の可能性は常に存在します。そうした可能性をしっかりと考えるスタジオにしようとしたのです。具体的には緊急の避難住宅をテーマにしました。緊急であるということは、時間、コスト、空間など全てにおいて、他の選択肢を考える余裕が無いということです。チリというまだ貧しく必要性以上の選択肢がほとんどない国から来た建築家として、豊かで多様な選択の可能性が満ちている国という環境で、そうしたテーマを設定することに価値があると思ったのです。その点でチリのような国で学ぶことにも、貧しさという現実が常に恣意性のフィルターとして有効に働いてくれるという利点があります。とにかく現実という選択肢しかない。選択が

限られていることをいかにスタジオの利点として活用するかが重要でした。戦略的な必要とはそういう意味です。

二つ目は、あえて言うなら自分の無知への羞恥心です。ハーバード大に着いてすぐに、以前とはいろいろな地位や権力への距離が異なることに気づきました。例えばハーバード大関係者というだけで、チリの住宅担当大臣に会う機会が突然生じたりします。しかも、これが必ずしも良いこととは限らないのです。例えば住宅担当大臣との会食の機会があり、他にもエンジニアや法律家などがいる中、私が唯一の建築家ということがありました。話題がチリの住宅政策になったとき、建築家であるはずの私は、何も議論に割り込むだけの知識も理解も持ち合わせていませんでした。とにかく自分が恥ずかしくなりました。テーブルで唯一の建築家である私が、うまくすればチリの住宅政策の、何百万人もの人の暮らしを改善する提言ができたかもしれない議論の場で、何一つ知的な発言ができないのです。それ以来、自分の立場を最大限に活かし、もっと政治や社会など、建築外の事柄への理解を深めて、常に貢献できる機会を逃さないために準備をするということを意識するようになりました。私が実際何かできるかどうかは別問題です。そうした機会を持ちうる特別な立場にいるのなら、それに備えて準備をしておくべきだということです。

当時は誰も、ソーシャルハウジングという分野に本気で創造的に取り組もうとはしていませんでした。実際非常に複雑な問題でしたから。ここが第三の理由になります。つまりソーシャルハウジングというのは、知的な解決という意味で未開拓の分野だったのです。当時この分野は過剰に人道的視点や倫理的価値感などに支配されていました。しかし慈善という行為は、現実の社会を本質的には変えてくれません。必要だったのは、ビジネスとして創造性を発揮しようとする意識でした。私は自分を人格者だとは思っていません。平均的な建築家です。ただ建築家だからこそ専門職として、仕事として変えられる価値があるのではないかと考えたのです。それは一般にデザインというものが社会的必要として理解されていないという、建築家にとっては非常に大きな問題にも関わります。建築家に対する社会の一般的な態度とは、「建築家は無駄に使えるお金があるときに雇うものだ。機能的なプロジェクトには建築は雇わないほうがいい」なのです。デザインとは価値を生まないし、コスト削減を助けないという理解です。これは建築が、社会の中で機能的なものではなく文化的なこととして理解される傾向によりるところが大きく、つまり文化は、現実社会では基礎的な必要とは理解されていません。天災で橋や住宅が壊れれば、その瞬間から多くの人の生活を脅かしますが、美術館が壊れたところで、生活の根源的な部分は何も変わりません。

建築は、どうにも文化や芸術といった価値に必要以上に関連付けられてしまっているようです。ですから大きく重要な問題、国家的な問題というのは、得てして建築の干渉を避けようとします。これはチリだけでなく、世界的な傾向でしょう。逆に言えば、そうした重要な議論では、建築家が好んで語るような話題は必要とされていないのです。

パートナーとの出会いがもたらす問いと行動

AA:
以上、立場の戦略的活用、自己羞恥、そして専門職としての可能性という3つが、私がソーシャルハウジングに意識的に取り組むようになった主な理由です。当時まだ漠然としていたこれら

の理由に、具体的な方向性を示してくれたのが、今ではエレメンタルのパートナーとなっているアンドレス・ヤコベッリでした。彼はハーバード大学のケネディ行政大学院に留学していたエンジニアで、私がこれまでに出会った中でも最も聡明な人物の一人です。彼は様々な問いを設けることで、これまで無意識のうちに考えることを避けてきたようなことを、明確な意識の下に取り出してくれるのです。その当時、私はチリの建築界は以前よりも成熟しつつあると感じていました。少なくとも５～１０人くらいの本当に質の高い建築家がいましたし、あるモーメントを持ちはじめていたように思えたのです。ところがヤコベッリにそう言うと、「そんなにチリの建築の質が高いというなら、なぜソーシャルハウジングはあんなに質が低いのか。」と問われました。これはショックです。そして彼は、「じゃあ僕達でソーシャルハウジングを変えてみよう」と続けます。建築家にとって何かをするというと、本を書くとか展示をするとか、講演をするとか等をを意味します。しかし彼にかかると、それならソーシャルハウジングを自分達で建ててみよう、となるのです。ソーシャルハウジングという特性上、本当に建てても１ユニットでは実効性は示せません。少なくとも１００ユニットというレベルで建てなければ意味がないのです。１００ユニット建てるのには１千万ドル程度の予算が必要です。さらにヤコベッリは、「お金を集めるなら、百万ペソを集めるのも百万ドルを集めるのも労力は同じだ。それなら百万ドルを集めよう」と言い出しました。これは実務として土地を確保し建物を建てようとする、各分野のプロが関わるプロジェクトです。我々が頑張れば済むという話ではなく、実際にお金を払いはじめなければ何も始まりません。ただここで重要なのは、我々はこの問題に、あくまでデザイナーという立場で解法を探ろうとしていたということです。現行の法律や市場のルールを前提として認めた上で、デザインを通して新しい解決策を探ろうという点が、我々にとっての鍵でした。

私がそれまでに関わった一般的な意味での建築をデザインするという仕事は、要は短距離走のための筋肉を鍛えるようなものでした。ソーシャルハウジングというのは別種のスポーツです。ただ早く走れればいいというわけではないのです。デザインというものに、とにかく余計な肉を削ぎ落した、それ以上何も簡略化できない状態が不可避的に求められる。エレメンタルという名前はまさにそういうことから来ています。ソーシャルハウジングでは、エレメンタルであることは選択肢でなく必須の条件です。同時に、ソーシャルハウジングを経験することで、物事を常に根源的な核心に立ち戻って考えるという手法が身に付き、それを一般のプロジェクトに還元できたというのは我々にとって幸運でした。

多くのことを統合するということ

KT：
私はいつもアラヴェナさんの作品を見て、政治や生活のリアリティなども縦横にデザインの中に取り込んで、常に２つ以上の要素の間で絶妙なバランスを見つける感覚がとにかく凄いと感じています。２つの要素の間で常に振動しているのに、決してどちらかに安定してしまうことがないような、そんな不思議な絶妙かつ繊細なバランスの感覚です。

またデザイナーとして、アラヴェナさんの作品が一般的なソーシャルハウジングの中で特に異彩を放つのは、大胆に現実に切り込みながらも、決してデザインの繊細なバランスを失わないという強度によると感じます。よく恣意性をフィルターにかけると述べられていますが、常にアラヴェナさんの建築には、ソーシャルハウジングのプロジェクトであっても、何か説明のし

ようがないデザインの質がいつも緊張感を保って残っています。こうした感覚というのは、どういう意識から生まれるものなのでしょう。現に今回のＴＯＴＯギャラリー・間での展示も、非常に研ぎ澄まされた感度を感じさせる展示になっていて、社会性や現実を展示する類のものではありませんね。

AA：
この後もこういう質問が続くんですか？もしそうなら、今日は全く時間が足りなくなってしまうな。いや、今の質問が本当に良い問いなのでそう言ったのですが…。今指摘されたポイントは非常に気付くのが難しいことで、指摘してくれてとても嬉しく思います。そして、そこがまさに我々が目指していることなのです。もし建築に何らかの可能性があるとしたら、それは総合する力なのだと考えています。そういう意味で、我々は建築の最も重要な核と常に向き合っているという自負があります。デザインの力というのは、複雑な問題を複雑さを保ったまま、過度な単純化を避けつつ扱うことができ、かつ結果的に実社会で使えるものを産み出せるというところにあります。我々がプロジェクトやデザインを公式という形で説明しようとするのも、建築が科学だなどと言いたいのではなくて、公式という表現が、問題の本質をより的確に表現してくれると感じるからです。お金や人、場所、素材、時にはどうにも説明のしようのない物事のキャラクター、そうした属性が、それぞれに個別の問題に関わってきます。例えば最近われわれが関わっているプロジェクト（「アナクレート・アンジェリーニ・イノベーション・センター」）でも、こうした属性全てが当初から複雑に絡んでいました。デザインを進めることで、素材の選択、高層建築であるということ、環境など、それら全てが建物のキャラクターとでも言うべきものに統合されていきます。それは建物に入った瞬間に、最初に感じる本能的な印象のようなもので言葉に表しにくいのですが、それこそが建物の本質なのです。何か幸せな雰囲気を持っているとか、時間を超えた質を持っているとか、質素で厳格な緊張に満ちているとか、方法論やシステムに落としこむことはほとんど不可能ながら、そうした質こそが人に影響を与える建物の特質なのです。どんなに感覚的で難しくても、この本質を避けては問題の核心には至れません。

プロジェクトをまとめる時に意識するのは、そのプロジェクトの公式に必要な項目をしっかり目の前に並べ切れているか、常にそれらが反映されていることが確認できる状態が保たれているか、ということです。厳格であるか厳格でないか等は建物のキャラクターで、キャラクターというのもそのプロジェクトという問いの公式の一要素です。

こうした関係性に意識的になることで、今自分が進めているデザインが、ただ自分の感覚的なテイストを形にしているだけでなく、しっかりと必要な要素を必要なバランスで盛り込めているかを常に確認する道具を得ることができるのです。地域社会や自治体などと仕事をしている時、あなたが良いテイストを持っているという理由だけで人々を説得することなど不可能です。テイストよりも深く堅固な基礎を構築する必要があるのです。テイストとかスタイルというのは手書きの文字のようなもので、私の筆跡はどうしようもなく私のものです。文字の形の美しさにこだわれば、突き詰めた先は形式でしかありません。私が重要だと思っているのは、文字が記述する内容であって、文字そのものの習字的な美しさではないのです。

建築の力

AA:
公式という形は、どういった要素がどういう関係性で問題に関わっているかを直感的に理解するのにとても有効です。でもそれを実際の案としてまとめるという段になると、理屈では説明のできない専門職としての技術（ルビ：アート）が必要になります。それは恣意性というよりも、全てのものを統合するより厳密な直感と言った方がいいかもしれません。何も見えない深淵にジャンプするようなもので、明確な道筋は見えません。アイディアはどうやって生まれるのかといえば、突然そこに現れるのです。あなたが直感を最大限に研ぎ澄まして、公式の全ての要素を十分に消化して、その結果として何かをアイディアとして吐き出す時、アイディアの遺伝子には必要な要素が全て盛り込まれているでしょう。それが上手くできれば成功なのです。もし十分に時間をかけなかったり、必要な要素を必要なバランスで消化していなかったりすれば、アウトプットは必然的に何かを欠いてしまいます。

パートナーのヤコベッリがよく言っていたのですが、建築家は現実世界の複雑さに直面した時、まずその複雑な状況をごく限られた変数で扱えるように単純化してしまう傾向があります。その上で解法を導き、回答を必要以上に複雑にして、実際の複雑さに対応しているように見せようとします。一方エンジニアはというと、現実の複雑さは嫌という程理解しているので、それらを全て取り込んだ上で導き得る最も簡潔な回答を探そうとします。現実が複雑なことは避けられないので、せめて回答はできるだけ単純なものにして、扱い易いようにしようとします。これは統合の仕方にかかわる本質的な違いです。建築に力があるとすれば、多様な記述不可能な関係性を、デザインという統合体として回答を示せるという点でしょう。分析レポートや特定の書類、診断書などの記述的な形式を取らなくていい。漠然としたデザイン提案という形式には、ジャンプを経て全ての相反する要素が遺伝子の中に統合される可能性があるのです。私は、現実の複雑さを肯定する立場から、自ずから矛盾を含まないような問いにはそもそも価値がないと思っています。建築とはほとんど宿命的に、単純に技術的な段階からとにかく矛盾を含むもので、経済や環境、政治や法規などの要素が加われば、その要求の複雑さは当然飛躍的に増していきます。

この説明できない複数の要素間で直感的なバランスを見つけ出すということは、建築という分野の最もパワフルな特質だと思うのです。理屈でなく、最後に全ての矛盾する要素を共存させうる方法として、ということです。建築デザインの善し悪しというのは、そうした視点でこそ評価されるべきだと考えています。

チリの建築事情

KT：
とても興味深くて、正直夜通しお話を伺いたいところなのですが、残念ながら時間という現実があるのでここでより具体的な質問に戻させてください。アラヴェナさんの、対立する複数の要素を共存させて、複雑な現実をそのまま一つの形として保ち続けるというのが非常に特別な才能なのだということが理解できたように思います。チリでの建築教育には、そうした下地を作った要素があったのでしょうか。チリでの建築教育や若手建築家がどう活動を始めていくかなど、少し教えていただけますか。例えば日本では、若手建築家は、小さな個人住宅を設計することから仕事を始めていくことが一般的です。デザイン料は決して多くはないですし、日本は長期的な経済停滞に悩まされていますからそんなプロジェクトを継続的に確保していくこと

すら困難な中、こうした状況が今の日本の建築家の特色を作っている部分もあるように思います。チリではどのような状況なのでしょう。

AA：
チリは、過去１０年ほどでかなり劇的に変化しています。端的には、経済的に潤いつつあるということです。歳入はこの間に約３倍になっていますし、それに伴い経済的な安定性も高まり、結果として建築にも好影響を与えています。そうした状況下ではクライアントもより洗練され、おしなべて建築のような分野には良い条件が整うようになります。問題はといえば、建築系の大学が増えすぎているということがあるでしょうか。私が学んでいた頃は全国で１０ほどしかなかったのが、今では５０を越しています。

私が学生だった当時は、ヨーロッパやアメリカでは一度誰かのところで仕事をして経験を積むというのが一般的ですが、チリでは卒業後いきなり仕事を始めるということが当然のこととして受け入れられていました。今日本の状況として挙げていたような、小さなプロジェクトに小さな報酬などもチリでも同じです。それが仕事を始めるということでしょう。重要なのは、プロとしての独立した考えや責任を持つということなのだと思います。成功するも失敗するも自分次第で、ボスや事務所のせいにはできません。間違った判断には自分で責任をとる以外何もない。プロとして、非常に明快で健康的なことだと思うのです。ただそれも、主には学校が増えすぎたことで最近では状況が変わりつつあります。単純に、質の高い教育を維持するには良い教授が必要です。でもそんな短期間に、５０もの学校に十分なだけの教授を発明するなんてことは不可能です。もしチリに１００人の素晴らしい建築家がいるとしても、単純に計算して各大学に二人では十分とは言えません。しかも、少なくとも私が知る限り、素晴らしい質を持つ建築家は１０人、せいぜい１５人くらいしかいないのが現実です。

今後はより競争が激しくなることで、状況もより難しくなり、教育の質もまた低下するかもしれません。ただ反面良い部分も確かにあり、建築を学んだ人が一定の必要量（ルビ：クリティカル・マス）以上いるということは、実は重要なことなのです。全体としては、やはり質は上がっているように思います。特に個人住宅などばかりではなくて、公共建築などでも質が上がっているのは感じられます。おしなべて良い方向に変わりつつあると思います。

KT：
職能として、より多様な可能性が開かれつつあるということでしょうか。

AA：
そうです。一定の必要量（ルビ：クリティカル・マス）が大きければ大きいほど、クライアントがより質の高い建築に接する機会も増え、より良いプロジェクトが生まれる可能性が増えます。チリではよいモーメントが生まれつつある、それもここ数年という話ではなく、少なくとも過去１０年から１５年ほどかけて起こっている変化で、表面的なトレンドではない何かが動きつつあります。最近ではチリの建築家もより海外に出ていく傾向がありますし、より国際的な意識の中で競争原理が働くというのは、私はとても健康的なことだと思っています。

地震、津波、復興

KT：
何かが生まれつつあるモーメントというのは特別な感覚ですね。一度チリに行って直接感じてみたいと思いました。さて、最後に今回このタイミングでお話を伺うにあたり避けて通れない点について伺いたいと思います。今も日本とチリの建築を取り巻く状況について少し触れて頂きましたが、両国にはもう一つクリティカルな共通体験があります。チリでは昨年巨大地震とそれに伴う津波を経験し、全国的に大きな被害を受けました。そして日本では、３月１１日に未曾有の地震と津波、それに伴う原子力発電所事故と、複合的な大災害を経験したばかりです。もちろん建築家は短期、長期ともに大きな責任を持つことになります。実際数多くの建築家が多様なレベルで献身的な活動をしている状況が今も続いているのですが、社会的責任ということと同時に、そこには同時にデザイナーとしてのエゴというか、自分の名前を出したいという部分との、表には出ない葛藤があるように感じています。

例えばアラヴェナさんは、津波で大きな被害を受けたコンスティトゥシオン市の復興計画なども手がけられていますが、貴重な経験を１年先行してされている立場として、日本の建築家や社会に対して、何か提言やアドバイスなどはありますか。

AA：
知識の種類というか、建築というものをどう理解し位置づけるかという部分が、壊滅的な破壊にどう対峙するかという問いを考えるのには重要な気がします。

でもそれは、何か特別というわけではなくて、建築家としてソーシャルハウジングや公共交通や大気汚染といった問題に、どう実効的に対峙するかという問いと本質的には同じなのです。共通するのは、求められているのは一般解だということです。つまり、それは建築という狭い分野だけに属する問題ではなく、社会全体が関わる大きな問題なのです。私が思うに、建築家に欠けているのは、建築の外側から問題を考えるというトレーニングです。我々建築家は、問題を解決するにあたり、建築という分野の内部での操作ばかりをしたがります。しっかりと建築の外の視点で物事を理解した上でならば、デザインというジャンプを経ることでより広い事柄の統合がなされ、社会と理解を共有することができる可能性が出てきます。そして少なくとも、建物をデザインし建てるという技術自体は、我々建築家が学び身につけている具体的な技術で実行できます。

では我々がどうそれを実行したのかと問われると、私も正直説明できません。ポイントだったのは、私のパートナーが問いを設けることに長けていたということでしょうか。例えばなぜペットボトルがガラスの瓶に比べて被災地に水を送る手段として優れているのかといえば、答えは簡単で軽いし直接重ねて運んでも割れる心配がないということになります。これは単純な例ですが、こうした問いをデザインの過程にシステマティックに当てはめていくと、演繹的に導かれる答えはより広範な人に共有し、評価してもらえるものになっていきます。最初に行うべきなのは、こうした問いの設定なのではないですか。復興、地震、津波、壊滅的打撃を受けた地区、そうした事実に、一つひとつ問いを重ねていくことです。。

もしあなたが唯一の建築家として経済学者や政治家、交通エンジニア、建設業者、不動産業者、消費者などの代表と同じテーブルに着く機会があるなら、紙とペンを取り出して皆の意見を集約した案を描き出すことも可能でしょう。でも一人で他の分野の人の声も聞かず、狭い建築という世界観でデザインを始めたら、真に実際的に多様な要求が反映された回答は引き出せ

ないでしょう。有能なコンサルタントなら、多様な分野からの主張を十分に理解できるかもしれませんが、それらを体現する図面は描けません。結局は、誰かが図面という具体的な形に統合しなければならないのです。そこにジャンプをしなければならないのです。問われているのは、建築という概念をどう理解するかという本質的なことです。大事なのは、現実の問題の複雑さに建築の外側から取り組むという姿勢なのです。そしてその問いへの解法を建築の専門的な知識と技術とを通して組み立て、最後にもう一度社会へと、社会が理解できる形で戻すというプロセスです。

コンスティトゥシオン市での復興計画

AA：
コンスティトゥシオン市の計画に関しても、我々が直面したのはまさにそうした問題でした。チリの沿岸の都市は津波に対して有効な防御策を持っていません。実は今回の地震では、驚くほどに地震そのものでの被害は少なかったのです。しかし津波となると話は別で、誰もが分かっていたけれど何もできていなかったというのが実情です。戦略的な対策や可能性は数多くあります。低地を放棄して高台に街を動かすべきだと主張する人もいますが、特にチリでは全く非現実的な話です。チリでは平地はとても希少価値のある資源ですから、経済的に価値のある土地が低地である以上、そこを無人のまま維持するということは現実的には不可能です。日本のような国でなら、低地を居住禁止にして法律でその状態を維持することも可能かもしれませんが、チリでは間違いなく不法占拠住居が増え、すぐに正規に建築が認められていた時以上に悪い状況になるでしょう。そういった実効性のない案を考えるということは専門家としては考えが甘く、また無責任でもあります。また別の人は、強固な防潮堤を築いて街を守ればいいといいます。でもこれも言うまでもないことで、今回日本の例でも実証されています。

KT：
専門的視点として甘いのではないかと。

AA：
そうです。津波とは一般にいう波というレベルでは全くなく、海自体がそのまま上昇するような全く想像を超えたエネルギーです。インフラでそれを止めようというのは、回答には成り得ません。我々が考えたのは、地形的な環境への回答は、地形的な要素で行うということです。まずは水際に森を設け、津波のエネルギーを低減します。完全に止めるのは無理でも、樹木や地形の凹凸や摩擦によりエネルギーを３０～４０％は低減することができるのです。また建築物は、水平方向の圧力に耐えられる構造で、低層部をあえて水圧を受けたら壊れる壁と頑丈な柱で構成し、津波を受けて低層部の中身は流されたとしても、構造と上階の居住部は守れるという考え方でルールを設定しています。まず守らなければならないのは人命ですから、こうしたプライオリティーを明確にした設定が必要で、もちろん避難の行動計画なども重要であることは言うまでもありません。防潮林や避難計画、構造条件付きの地区指定などを組み合わせて、市民にできる限り以前の暮らしに近い状況、もしくはより良い状況を提供したいと考えているのです。完全に前と同じとは行きませんが、少なくとも現実的に経済活動を行い、活き活きとした市民生活が営めるような街としての実効性を保てる案にしています。こうした提案は、必ずしも復興という新しい問いにのみ答えるものではなく、以前から継続的に抱えていた問題も同時に解決し得る重要な機会でもあります。例えばチリの都市部では、公園などの公共

空間は市民一人あたり国際的な推奨値９㎡に対して２㎡しかありません。しかし今回防潮林を公園として整備することで、コンスティトゥシオン市では一人あたり６㎡にまで改善されました。これは市にとって非常に価値のあることです。さらに、市は山からの洪水という問題も抱えていました。ほぼ毎年のように起こる洪水に対しても、殆どの場合この公園内だけの浸水で止めることができるようになり、同時に川という、これまで個人所有地の背後で一般のアクセスがなかった公共財産を、日常的に感じられる環境をつくり出すことができます。

ですから、ここでも複合的なアプローチが鍵だったということになります。外からの新しい問いを設定し、そこに創造力を加えていくということと、同時に以前からの問題も総合的に解決できる方法を探すということです。

KT：
一石でできるだけ多くの鳥を落とす可能性を、総合的かつ現実的な視点で探していくということですね。形のデザインというよりは、様々なスケールでのシステムのデザインという感覚に近いような気がします。

AA：
そうです。繰り返しになりますが、チリのように財政資源が潤沢ではない国では、１＋１＝４となるような解決方がどうしても必須となるのです。それができない限り予算もつかない。とても単純な話ですが、そこがデザインの本質でもあると思っています。

あとがき：非常にタイトなスケジュールの中、真摯に、一つひとつの質問に言葉を選びながら話す姿勢が印象的なアラヴェナ氏。活動のスケールに比してまだ若く、とても気さくな人柄が印象的な中にも何か威厳と良い意味での緊張感を漂わせているのは、日常生活の中でもあらゆることに目を向け、真剣に問いを重ねることを常に心がけている結果ということがひしひしと伝わってきた。ハーバード大で教えていたこともあり、相手に話題のポイントのもう一つ広い視点、考えの前提となるビジョンを提供しながら構成を伝えようとする姿勢、どんなに話に乗って長い回答になっても結論を見失わない明快さは、とにかくさすがの一言。堅実な考察の積み重ねの先にこそ、論理を突き抜けた何かを獲得することができるのだと、アラヴェナ氏本人の言外の態度そのものからも再確認することができる貴重な機会となった。